
「豊かさ」について

仲善・善東中 北岡 育代

今年3年生を担当している。俗に言う、「厚物」の問題集の何ページかを夏休みの宿題に出したところ、その中に課題作文のページがあった。中には模範解答の作文をそのまま写している不届きな生徒もいたが、大半は真面目に取り組んでいた。

作文のお題は、「本当の豊かさ」について自分の考えを述べるものだった。二段落構成、一段落目には、自分が「豊かさ」について考えるきっかけとなった具体的な体験を書き、二段落目には、それをふまえて「本当の豊かさ」について自分の考えを書く、という条件である。ヒントには、「一般的に言われている『豊かさ』ではなく、自分自身の考えを書こう。」とある。「一般的に言われている『豊かさ』とは……既に、その時点で何が一般的なのだろうと思いつつも、生徒たちの作文を読む。そこには、思いのほか、まさに、豊かな体験が広がっていた。

生徒たちの「本当の豊かさ」体験をいくつか紹介しよう。

小学生の時、祖母と庭の家庭菜園で収穫した野菜を使って晩御飯のおかずを作ったこと。自分たちで、食べるものを栽培しそれを調理する、そういう時間や過程が豊かである、と。また、別の生徒は、小さくなった消しゴムを、途中で買い替えず最後まで使い切ったことに豊かさを感じた体験を書いていた。ある生徒は、幼稚園に通っていた時、一つのおもちゃを奪い合わず、今で言うならシェアしたことが豊かであると述べていた。

この生徒たちとは、1年生からのお付き合いで、条件作文もたくさん書かせてきた。条件に合う、整った文章が書けるようになるまでも、結構な道のりだった。三年生になったあたりから、大体の生徒は、とりあえず条件にあった作

文が書けるようになってきた。とはいえ、内容に関しては、物足りないなあと思うこともあった。しかし、今回の宿題の作文で、思いがけず、生徒たちの心の豊かさに触れることができて、うれしかった。

今年から光村図書の教科書に入っている「言葉の釣り糸を垂らす」(いしいしんじ著)ではないが、子供たちの記憶の海に「豊かさ」という言葉の釣り糸を垂らした結果、それぞれの豊かで温かな体験が呼び覚まされたのであろう。

さて、生徒たちの作文を読みながら、私は何で豊かさを感じているのだろうと思いを馳せてみる。「豊かさ」を自分なりに抽象的に定義することは難しいが、今まで過ごしてきたどの時間が豊かであったか、と考えると、おそらく子育てをしていた時期だろうと思われる。仕事もおろそかにできない中で、たくさんの方に助けていただいていたなんとかやっていた。まさに濃密な時間であった。

本屋大賞も受賞し、映画化もされた「そして、バトンは渡された」(瀬尾まいこ作)の中の、主人公の義理の母親である梨花さんの言葉がとても印象的だ。「優子ちゃん(主人公)の母親になってから明日が二つになった」。つまり「自分の明日と、自分よりたくさんの可能性と未来を含んだ明日が、やってくる」のだと。

子供に限らず、誰か大切な人のことを考える時間は、自分の人生を豊かにしてくれるのだろうと、実感を持って確信した。楽しいことばかりではもちろんなく、胃のきりきり痛む朝を迎えたこともあるが、誰かのことを思い、幸せを祈る時間は、豊かさそのものであったと言える。

今、目の前にいる生徒たちにも、自分のことだけでなく、誰かを思いながら夜明けを迎えるような、豊かな時間がきつともっと訪れますように。